介 護 職 員 自 己 評 価 表

2022年1月14日

事業所名	通所介護　デイサービスリハビリセンター瀬々串

	正社員	非常勤社員
社会福祉士	1人	
介護福祉士	5人	
理学療法士	3人	
介護支援専門員	1人	
実務者研修修了者,その他	2人	3人
准看護師		2人

※複数資格者含む

◆前回の改善計画に対する取組み状況

個人チェック項目	よく できている	なんとか できている	あまり できていない	ほとんど できていない	備　考
前回の課題に関する改善	12.5%	27.3%	37.5%	22.7%	

前回の改善計画

前回の計画は、①コミュニケーションを含めた対人援助技術の向上、②各スタッフの目標設定、③体調管理を含めたスタッフとの面談の実施、④介護技術の教育プログラムを見直しであった。特に、対象者の接し方や態度について86%、意思疎通について57%のスタッフが「あまりできていない」「ほとんどできていない」と感じており、認知症ケアで求められるコミュニケーションスキルに不安を感じていた。加えて、介護技術に関する「排泄」57%、「食事」43%、「入浴」43%、「着替・整容」43%が「あまりできていない」「ほとんどできていない」と感じており、介護技術の教育プログラムを見直す必要があった。一方、移乗・移動については71%のスタッフが「よくできている」「なんとかできている」と感じていたことから、各スタッフのスキルを評価したうえで、課題を押えながらOJTを中心にスキルアップを図る計画とした。

前回の改善計画に対する取組み結果

コミュニケーションスキルを含めた対人援助技術は、OJTを中心に認知症ケアに知見を有する外部講師の社内研修でスキルアップを図った。介護技術は、介護の知見を有する外部講師の社内研修により、ケアカウンセリングの活用法と解決手法についてスキルアップを図った。さらに、専門性の取得と介護技法の習得を目標に社内研修を実施した。スタッフの技術評価を行い、課題克服に向けたOJTを実施した。余裕のあるスタッフ配置になっているものの、多様な機能訓練の提供から業務中では十分なOJTが行えず業務終了後に行った。スタッフの課題や負担は、業務の内外を問わず相談に応じる、悩みを一人で抱え込まさない取組みと高頻度のスーパービジョンで解消を目指している。結果、認知症ケアに一定のスキル向上がみられた。

◆今回の自己評価の状況

確認のためのチェック項目(偏差値)		よく できている (60以上)	なんとか できている (50～59)	あまり できていない (40～49)	ほとんど できていない (39以下)	合　計
SECTION　1	対象者の接し方や態度について	12.5%	12.5%	50.0%	25.0%	100%
SECTION　2	仕事上の態度について	12.5%	25.0%	37.5%	25.0%	100%
SECTION　3	食事について	25.0%	0.0%	37.5%	37.5%	100%
SECTION　4	移乗や移動について	12.5%	37.5%	50.0%	0.0%	100%
SECTION　5	排泄について	12.5%	25.0%	25.0%	37.5%	100%
SECTION　6	入浴について	12.5%	12.5%	75.0%	0.0%	100%
SECTION　7	着替えや整容について	12.5%	37.5%	37.5%	12.5%	100%
SECTION　8	服薬について	12.5%	25.0%	37.5%	25.0%	100%
SECTION　9	意思疎通について	12.5%	37.5%	37.5%	12.5%	100%
SECTION　10	行動障害について	0.0%	62.5%	0.0%	37.5%	100%
SECTION　11	普通の生活やアクティビティについて	12.5%	25.0%	25.0%	37.5%	100%

自己評価及び改善が必要な事項

身体的な機能訓練は、理学療法士とトレーナーが連携し取組み、生活支援員と理学療法士により巧緻作業、回想療法、顔表情に基づく心理療法等による認知症ケアを行っているが、対人援助に自信が持てず、移乗・移動介助を除く介護技術全般に不安を持つスタッフが多いことが分かった。業務中に生じた課題は30分程度の残業をお願いし高頻度のOJTを行い、外部講師による研修を週一回開催し知見と技術の底上げを図った。結果、「興味のある話しがわからない」とするコミュニケーションに不安を感じるスタッフは少なくなった。介護技術は、各スタッフの不得意な項目がわかり効果的にスキルアップを図っている。一方、新人スタッフにおいては不得意な項目が複数あり、当法人の介護マニュアルを研修するなど、教育プログラムを検討する必要があった。トレーナーは、理学療法士による社内研修のほかに社外研修の受講を通して健康運動実践指導者の資格取得を目指している。提供する機能訓練に対して、ご利用者から「利用日数を増やしたい」「利用時間を延ばしたい」等の声が多くあり、機能訓練への期待感は高い。

主任 梅津　豊

外部評価者

収束傾向にあるもののコロナ禍での支援は課題も多いと思います。厳しい感染予防対策を行っていることから、職員は顕在的な負担のほかに潜在化した負担も多いと思われます。職員の負担や課題は、原因を把握するためにしっかりと話し合うことが大切です。それぞれの職員には違いがあるように、技術の習得や悩みも異なります。面談で解消する事も多いと思われますので、引き続き業務の内外を問わず相談に応じる、「悩みを一人で抱え込まさない取り組み」を続けてください。スーパービジョンは高頻度で行っているようですので、些細な事でも相談できる環境維持に努めてください。利用者は、機能訓練への参加意欲が高く機能訓練を高く評価している事が確認できました。機能訓練は、機器を取り入れた有酸素運動やレジスタンス運動で身体機能の向上を図り、小集団のコグニサイズ、巧緻作業、回想療法、顔表情に基づく心理療法等で認知機能を高めるなど、興味深い取り組みがなされていました。国が推進する科学的介護に則した支援が提供されていることが分かりました。一方、比較的元気な利用者が多いこともあり、移乗・移動介助を除く介護技術全般に不安を持つ職員が多い傾向がありました。業務内では経験を積みにくい環境のようですので、教育プログラムを見直し介護マニュアルの指導を加えることが必要でしょう。総合的な評価は、利用者に適した支援を提供するため、多職種が協働してサービス提供していることが推察できました。今後も地域に根ざした事業所として頑張ってください。

〒891-0141 鹿児島市谷山中央5丁目37-11-302
特定非営利活動法人かごしま福祉開発研究所
社会福祉学博士　田　中　安　平